完全はみだしストーリー『 高橋の災難』

三年近く前の話になる。

渋沢中学校の二学期目に転校してきた。 鎖。関東地区にやって来て、僕と只野が通っていた都立 だが、それから二ヶ月後、会社方針により大阪支店が閉 橋少年は中学二年生になって大阪に行くこととなった。 父親の会社の転勤で神奈川県の川崎に住んでいた高

だクラスの女子生徒達が「高橋君、関西弁で何か喋って」 他の男子は耳をそばだてて彼が何を話すのか聞いてい とせがむ女子に囲まれた隙間から様子を伺う僕や只野、 口を開くと標準語しか話さない高橋少年を取り囲ん

えら~く長い躊躇いを含んだ沈黙の後、 小さな声で、

ぽそりと呟くように言った。

.....なんでやねん」

それは恥らう乙女のように小さな声だった。

だったからだ。 それもその筈。ニセ関西弁としか言えない、僕が聞 彼の言葉を聞いた女子達は黙る。 発でわかるほどの妙にズレたイントネーション

ίĭ

らんのや」と、必要もない関西弁で理由を語った瞬間。 「 大阪には二ヶ 月しかおらんかっ たしなぁ、ようわか 妙に空いた間の後、付け足すように高橋が言い訳する。

> 椅子に座ったまま固まっていた。 興味が失せたらポイ捨てとは……一人残された高橋は 女子って冷たい。 いた女子は蜘蛛の子を散らすように、散り散りとなった。 興味が失せたと瞬時に分かる反応を示し、高橋を囲んで ふぅ ーん。そうなんだ」とか「へぇー」といかにも もてはやすだけもてはやしておいて、

ませんでした、何があったのか知りませんでしたとばか遠くから傍観していた僕らクラスの男子は、聞いてい

りに視線を逸らした。僕も只野もその一員だったのだけ

ラスに打ち解けるチャンスを逃した転校生・高橋は、当 していた。しらけきった空気の冷たさは身にしみる。 弁同様に、控え目すぎて中途半端なために完全に空振り 自分ボケとか自分突っ込みも、口調だけを真似た関西 転校一日目の一時間目が始まる前の休み時間から、ク

時から結構大きかった体を小さくしていた。

えてしまうもがあった。 か、あれこれ聞こえてくる話の中に、さも事実ぽく聞こ なったとか、イジメにあって逃げてきたのではないかと れる運命なのか、問題を起こして前の学校にいられなく なにかしらの理由があるのだという変な色眼鏡で見ら ひそと話を始める。中途半端な頃に転校してきた生徒は 次の休み時間から、高橋のことでクラスの人間がひそ

からバリバリの関西弁を操るのが当然だという先入観 関西からやって来たのに喋れば標準語。関西出身者だ

は恐ろしい。

は?」そんな疑問から発展したクラスの皆の推測は、「も しかして言えない事情があるのでは?」という発想にま 「本当に関西出身? 本当は違う所から来たの

でたどり着いていた。

誰かが言い出した、この一説が何故か最有力説となっ

限りなく近いところまで行っているのではないかとも なかった。情報通の只野から最初に聞いたとき、妄想に てゆき、まかり通り始めるのにはたいして時間がかから

思えたその説とは、『夜逃げ』だった。 「本当は引っ越してきた元の場所がばれると身に危

険が及ぶから、関西弁を喋れもしないのに大阪から来た

と言っている」なんて理由が出来上がっていて、それが 「 夜逃げに違いない」 にまで達したというわけだ。 景気がよくない昨今だから、そんな理由も出てきたの

本人から本当の理由とやらを聞いたらいいのではない だろう。影でコソコソとあれこれ想像して噂するより、

だろうか。そんな僕の心中の意見を声に出して言う事も、 本人に問いかけることもしなかったのだけど..... ヒソヒソ話すクラスの皆から視線を痛いほどに浴び、

クラスに打ち解けることが出来ず、ポツンと椅子に座っ

眺めていた只野と僕は、そんな彼を不憫に感じて昼休み が休み時間に甲斐甲斐しく話しかけているのを横目で ている高橋。転校日から躓いた彼に学級委員の青木さん

のチャイムが鳴ると同時に話しかけることとした。

「一緒に昼飯食べない?」

「えっ、あっ、うん」

で

っちで流行っているものとか、食べ物のこととかなんか た。例えば、大阪のどこら辺に住んでいたのかとか、あ は机を挟んで昼飯を食べながらくだらない話を交わし いきなりの誘いに戸惑いながらも頷いた高橋と僕

只野が尋ねた。 だ。これって尋問みたいだったように感じたのだけど、 そんな問いかけに必死に答えて打ち解けてきた高橋に、

っていうけど、それはどうして?」 さっき、僕が心中で本人に直接聞けばいい 「そういえば高橋って、二ヶ月しか大阪にいなかった のにと思っ

本社の経営会議で大阪支店を撤収することが決まって、 さりと尋ねる。 ていながらも口にしないでいた質問事項を、只野はあっ 「親父の仕事の関係で大阪に転勤になったんだけど、

それで戻ってくることになった」

ればそれもそうだ。二ヶ月の間で耳が馴染んできたとい いる時間がなかったということが理由らしい。よく考え たことが判明した。関西弁が話せないのはマスターして 戻ることになったから、引越しは以外と楽だったかな」 事になるなんて、引越し大変だったんじゃない?」 これで高橋が夜逃げをしてやってきた訳ではなかっ 「うん。でも、ダンボールを全部開けきらないうちに 「へぇ、そうなんだ。行ったら直ぐに舞い戻ってくる

うしようもない。僕が高橋の立場なら、関西弁をマスタ うところで、戻ってこなければならなかったとすればど 約束をしたのだ。 「高橋、帰ろう」

- できていない状況下にあるだろう。関西弁が喋れない からといって、夜逃げ説に行き着くなんて、ちょっと無 込みながら、取り囲むクラスの人間達に話の途中で帰宅 と、「うん」と返事をして机の中の物を鞄に急いで詰め 彼を取り囲むクラスメイト達の隙間から声を掛ける

ある高橋は、手を振って僕らと共に教室を立ち去った。 立ち上がると、女の子達よりも頭一つ分程度の身長が

することを謝罪して立ち上がった。

校門まで向かう途中、僕は高橋に尋ねる。

「七十超えたぐらいかな」 「高橋って、身長いくつ?」

「家族みんなの身長はどれぐらい?」 高橋とのやりとりを横目で見ていた只野が質問する。 「うーん、適当に食ってたらこんなになった」 「いいなぁ、何を食ったらそんな身長になるの?」

で、妹は六十」 只野が呟く。 「そりゃ遺伝だ。しかし皆でかいなぁ

「親父は七十八で、お袋は七十二か三。兄貴が八十三

高橋は不思議そうな顔をして返事をする。 「そうかなぁ? 普通だと思うけど」

「家族が皆、身長が高いからそう思うというか、感じ

ついて言った僕に、気休め的な一言を高橋は無責任に述 るんだろうね。僕なんかもう少し欲しいよー」 伸びない自分の背丈を恨めしく感じながら、ため息を

耳をそばだてて聞いていたらしい。真の事情を知って、 責任じゃないか、皆? 昼飯を教室で食べていたクラスの皆は僕らの会話を

早かった。五時間目の休み時間からは、高橋の机の周り 遠巻きに見ていたクラスの皆の身の変わりようは実に には今まで遠巻きに様子をうかがっていた生徒が取り しきりに話しかける。

を見守ることにした。 いきなり人気者になってしまった転校生の高橋は、な

僕がその輪に加わることを拒否していた。仕方なく様子

彼の周りに出来た人だかりは、完全に出遅れた只野と

って笑顔振りまいて、クラスの奴らと適当に馴染めよ、心を示してくれないよりかははるかにマシだろう。頑張 んだか落ち着かない様に見てとれたが、一日中、誰も関

と僕は心で密かにエールを送った。

に只野と帰る方向が同じということで、一緒に帰宅する をして、鞄を手に高橋のもとへと向かった。昼飯のとき

ホームルームが終了した放課後、只野と僕は帰り支度

べてくれた。

会話はここで中断する。高橋と只野とは帰宅路が別ル「 高校とかで伸びるって言うし、 分からないよ」

ー トの僕が、二人と別れて自宅に向かったからだ。

ち、ついに八十を超えた。も身長はあまり伸びなかった。が、高橋はぐんぐんと育人の交友関係は現在進行形だ。中学在学中に、僕も只野こんな調子で始まった高橋と只野、そして僕という三

常に気を張り巡らしていないと、巻き込まれた事態がを終え、皐月高校の一年生となった僕らに変化が訪れた。身長ぐらいしか成長がなかったとも言える中坊生活

I

の再録です。

さんと都築さんにあるのだけど、彼女達のことについて徒会長に立候補、ダブル当選してしまった同級生の松田僕らが濃密な関係を結ばざる得なくなった原因は生いのであしからずと言っておきたい。が、決して同性で深く愛し合うとかという類の話ではなが、決して同性で深く愛し合うとかという類の話ではな

は語ると長くなるので、どこかに置いておき、高橋との

話に戻りたいと思う。

ではいないだろうか?二年の二学期に転校して、僕と巡り会ったことを悔やん二年の二学期に転校して、僕と巡り会ったことを悔やん史から任命され就任した可哀相な男、高橋。彼は、中学生徒会に新設された広報担当者として松田・都築両女

高橋の性格上、聞くのが一番なのだけど..... 転校してきとは困難なものだ。そんな時は結構あっさりとしている

彼の心中だけにとどまらず、人間の心の内を推量るこ

た一日目、大阪に二ヶ月しか居なかった理由を聞けなか高橋の性格上、聞くのが一番なのだけど……転校してき

ったのと同様に、勇気を出して聞けないでいる。

はみだしストーリー『 高橋の災難』・終わり

2009/05/05 のコミィティアにて配布したペーパ